

発展する中国東北地域と日中貿易のあり方について —北海道の水産加工貿易を例として—

小樽開発建設部 小樽港湾事務所 副所長 ○森 信幸
 計画課計画係長 富岡 直基
 計画課調査試験係長 下山 宗生

日本の最大貿易相手国が米国から中国へ移行し、近年東アジア圏を中心に経済・文化交流が活発化している。一方、中国政府が国策として打出した「東北振興政策」によって中国東北地域の貿易・投資は、拡大・発展し街は日々変貌している。中国で生活した経験から干しアワビや干しナマコは、中華料理の高級食材として中国の富裕層に珍重されているが、珍味として販売している北海道の乾物も中華料理の高級食材として活用が図れるのではないかと推察した。

本件では、北海道のタラ珍味を使用した中華料理を創作し瀋陽において中国人を対象に試食・アンケート調査を行った結果を基に日中貿易のあり方を考察する。

キーワード：日中貿易、水産加工、物流、北海道の乾物、中国東北地域

1. 発展する中国東北地域

(1) 中国東北地域の概要

中国東北地域は、北からロシアと隣接する黒竜江省（省都ハルビン市）、吉林省（省都長春市）、遼寧省（省都瀋陽市）の三省からなり、総面積78.9万km²（日本の国土の2倍）に日本の総人口にほぼ匹敵する総人口10,757万人が居住する地域である（図-1）。「満州国」時代の工業基盤を継承して発展した歴史を持つことから日本との関係が極めて深い地域であり、1950年代には中国経済を牽引する重工業基地として発展した。しかし、改革開放後の中国は、長江デルタ（上海市、江蘇省、浙江省）、珠江デルタ（広東省）を始めとした南方沿岸域に外資導入を図って優先的に発展させた。一方で国有企業の割合が高い東北地域は、このような発展の波に乗り遅れ、域内経済の停滞が続いていた。表-1に省・市別の

第二次産業の生産額の推移を示す。1952年には遼寧省が全省のトップで東北3省を合わせると22.8%と約4分の1近くのシェアだったものが、その後どんどん比重が下がって2004年には東北3省合計で10.8%と、かつての遼寧省単独の比率にも及ばない状況となっている。

2003年に中国政府は、国有企業改革、社会保障制度改革、投資の促進等を柱とする「東北振興政策」を国策として打ち出し、その結果として中国東北地域のGDPは9.4%と高度成長期を迎え、貿易・投資ともに拡大を続けている。特に、遼寧省の省都である瀋陽市のGDPは16.5%と群を抜いており、街並みも日々変貌している。

表-1 省・市別、第二次産業生産額シェアの推移



1952年		1978年		1990年		2004年	
1 遼寧	14.1%	1 上海	12.1%	1 江蘇	9.0%	1 広東	12.3%
2 上海	13.6%	2 遼寧	9.3%	2 山東	8.2%	2 山東	12.1%
3 江蘇	6.0%	3 江蘇	7.5%	3 広東	7.6%	3 江蘇	12.0%
4 河南	5.8%	4 山東	6.8%	4 遼寧	7.0%	4 浙江	8.4%
5 黒龍江	5.5%	5 黒龍江	6.1%	5 上海	6.3%	5 河北	6.4%
6 河北	5.4%	6 四川	5.4%	6 四川	5.6%	6 河南	6.2%
7 山東	5.1%	7 河北	5.3%	7 浙江	5.3%	7 上海	5.2%
8 四川	4.7%	8 広東	4.9%	8 河北	5.0%	8 遼寧	4.5%
				9 黒龍江	4.7%	9 黒龍江	4.4%
10 吉林	3.2%	16 吉林	2.5%	16 吉林	2.4%	20 吉林	1.9%
東北3省	22.8%	東北3省	17.9%	東北3省	14.1%	東北3省	10.8%
全 国	141.8	全 国	1,745.2	全 国	7,717.4	全 国	72,387.2

(注) 全国の第二次産業生産額の単位は〔億元〕
 出典) 新中国五十年統計資料集、2005中国統計年鑑

図-1 中国東北地方の位置図

(2) 発展・変貌する瀋陽市

中国東北地域最大の行政中心都市瀋陽市（旧奉天）の人口は北海道全体の人口より多い700万人、面積は札幌市の4.5倍を有する大都市であるが、日本人にとって上海、北京、天津等の大都市に比べ知名度は明らかに低く印象も薄い。また、戦時中の「奉天」と呼ばれた時代を知る日本人は、満州事変勃発の地という暗いイメージが先行し、戦後を知る者も中国最大の重工業都市として繁栄した経緯から多くの国有企業が立ち並び工場からの煤煙による「煤けた街」というイメージが続いた。近年では、2002年に発生した北朝鮮からの脱北者が総領事館に入り込む「瀋陽事件」が有名である。このように、瀋陽市は暗く、煤けて、危険な街という印象が長く定着していた。しかし、東北振興政策以降の瀋陽市の街並みは大きく変貌を遂げた。近代的なホテルや病院、銀行や商業ビルが次々と建ち、道路や公園の整備も進んで、大型デパートはショッピング客で溢れている（写真-1）。瀋陽中心街に樹立している100mを超える高層ビル群は、2004年以降に建設されたビルである（写真-2）。最近では、ブランド商品専門店も相次いで出店しており、日本でも馴染みのあるブランド品が売られている。このようなショップが瀋陽で展開できるのも、瀋陽市の経済が著しく発展してきていることの一つの証左である。

街が発展するにつれて、多くの日系企業が進出している。2003年から5年間で在留邦人数は2.1倍、日系企業数は6割の増加を示したが、その要因としては、①地域の経済発展、②政府による積極的な企業誘致及び優遇措置、③低コストで優秀な人材確保（高い日本語能力、三カ国語（日中韓）を話せる朝鮮族）など、日系企業が進出しやすい条件が整っていることが挙げられる（表-2）。北海道企業も、瀋陽市と札幌市の友好都市締結25周年を迎えた2005年11月、北洋銀行と瀋陽市との経済協力協定締結を契機として当地域への進出が顕著となった。現在、北海道を代表する2大銀行である北洋銀行が大連市、北海道銀行が瀋陽市に相次いで支店を開設し、道内企業に対する誘致説明会、商談会等を開催して進出をサポートしている。食品関連では、北海道の有名スナック



写真-1 ショッピング客で賑わう商店街

菓子やラーメン店等が瀋陽に進出し街は「北海道ブランド」が定着してきている。北海道企業の進出が活発化する中で、人的交流も盛んで、高橋北海道知事、上田札幌市長、北海道選出国會議員等、北海道を代表する要人がほぼ同時期に瀋陽市を訪問したことから当地域に対する北海道の関心の高さが窺える。

(3) 瀋陽市の治安状況と日本との関わり

瀋陽市は、満州事変の勃発地で戦時中は日本軍が侵略した地域であることから、その歴史を知る日本人は中国の中でも最も反日感情が強く日本人にとって治安の悪い地域であると考えられるかも知れない。しかし、2005年4月に行われた対日抗議デモに際しても、北京、上海とは異なり、瀋陽総領事館、周辺日本料理店、日系企業、在留邦人にもまったく被害がなく日中関係は極めて良好である。急速に発展している地域であるが、その実態は外国からの資金や技術支援に頼るところが大きく、特に日本からの投資に大きな期待が寄せられている。瀋陽市内には、遼寧大学日本研究所、遼寧省社会科学院など日本研究の公的機関があり、その研究者の話しを総合すると「良くも悪くも日本人と生活を共にした経験がある当地域は、他の地域と比べ日本への関心が極めて高い地域である。」日本人に対する印象として、「勤勉で高い技術力を持つ」と評価している中国東北人が多い。これは、当時世界最速を誇り新幹線の原型となった高速アジア号が時速130kmで満州鉄道を疾駆し、当時の建造物（奉天駅、大和ホテル、奉天警察、奉天総領事館、東洋拓殖奉天等）が現在でも利用されて身近になっているところが大きい。また、日本が造った道路や橋、工場によって戦後当地域が発展したことを指導者も良く理解していることから、現地政府関係者も日本と良好な関係を構築することで更に投資がなされることを期待している。



写真-2 高層ビルが樹立する瀋陽市街

表-2 在留邦人及び日系企業数の推移 ()は企業数

	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
遼寧省	2,760 (593)	3,361 (682)	3,793 (803)	4,805 (876)	4,935 (962)
瀋陽市	310 (58)	438 (72)	515 (76)	627 (88)	641 (91)
大連市	2,312 (508)	2,823 (580)	3,145 (693)	4,020 (763)	4,123 (843)
吉林省	242 (13)	327 (30)	349 (31)	374 (36)	383 (46)
長春市	194 (8)	293 (23)	257 (24)	264 (30)	267 (35)
黒竜江省	221 (13)	285 (17)	205 (17)	233 (16)	235 (16)
哈爾濱市	207 (12)	235 (15)	175 (15)	190 (14)	184 (14)
合計	3,133 (619)	3,973 (729)	4,347 (851)	5,412 (928)	5,553 (1,024)

2. 北海道貿易の可能性

(1) 瀋陽市街の市場状況

発展を続ける瀋陽市であるが一人当たりGDPは、まだ日本の8分の1程度で貧富の格差も大きい。瀋陽市場も南2市場、五愛市場は、低所得者層を対象とした食品（衛生的な問題は残るが）や生活用品等が格安で販売されている。一方、太原街、中街、瀋陽金融商貿開発区には、高所得者層を対象とした高級店も多く存在する。

外資系市場は、2003年頃からスーパーカルフール（フランス）が店舗を拡大してきたが、近年は西武百貨店や伊勢丹等の日系企業も進出し日本の米・味噌・醤油・菓子類等の品揃えも豊富になってきている。

瀋陽市内にあるカルフールや河畔スーパーの陳列状況を乾物について観察すると、品揃えが豊富な珍味（魚・肉・穀物等）が1袋100円～450円程度で販売されている（写真-3）。これに対して、中華料理の高級食材コーナーでは、干しナマコが4万円/kg～20万円/kg、干しアワビが9万円/kg、ホタテの貝柱が1万6千円/kgと高価な価格で乾物が販売されている（写真-4）。

(2) 瀋陽市における珍味アンケート調査結果

2004年から3年間瀋陽市で生活し発展する中国東北地域の実情と食文化を体験し、北海道の優れた水産加工技術で造られた北海道産乾物は、中国でも販路の拡大が図れると推察した。乾物を対象とした理由は次のとおり、①乾物は軽量化が図られ鮮度保持の心配がなく輸送が容易。②北海道ブランドは安心・安全な高級食材として当地で定着。③低迷する漁業・水産加工業の活性化。④乾物は中国で付加価値が高く日中貿易の販路拡大が期待できる。

北海道産珍味の評価を把握するため、2007年9月に北海道函館産珍味3種類（さきいか、タラ珍味、サケとば）を瀋陽市へ空輸し中国人（瀋陽日本領事館スタッフ・瀋陽市人民政府職員・瀋陽ノースメディア社職員）を対象に試食・アンケート調査を実施した（写真-5）。アンケート内容は、味評価（美味しさの5段階評価）、価格評価（希望価格）とフリーアンサーとした。

図-2に集計結果を示す。「さきいか」は8割以上が非常に美味しい（46.5%）、美味しい（39.5%）と回答し高い評価を得た。瀋陽市内でも、さきいか珍味は販売されているが函館産のようなウェットに富んだ珍味は少なく、乾燥して粉っぽくカジカを代用した珍味も存在し、柔らかく美味しいいか珍味が少ないことに起因する。一方、タラ珍味とサケとばは、3・4割以上が美味しくないという回答しており、美味しい回答を大幅に上回っている。フリーアンサーや回答者へのヒアリングでも「固い」、「生臭い」等の意見が多かった。今回の市場調査でも「タラ珍味」や「サケとば」の販売は確認されなかったことから対象者は、今回の試食が初めてであったと推察する。内陸部に在住する瀋陽市民は、基本的に生魚、生卵等のなま物を食べる習慣が少なく、また魚類でこのような固い乾物を試食した経験も無かったことに起因する。希望価格では、珍しさも加わりどの珍味も1袋300円～600円程度を示し中国珍味の価格に比べ高価な評価ではあるが、製造価格、輸送費、関税等を考慮すると輸出来る価格には至っていない。ただし、「さきいか」珍味については、味の評価が高く北海道ブランド（高級品志向）を打ち出した販売の可能性が残されている。例えば中国の中秋節は、月餅（あんの入った饅頭）を食べる習



写真-3 スーパーで販売している珍味



写真-4 スーパーで販売している中華料理の高級食材



写真-5 珍味試食アンケート調査実施状況

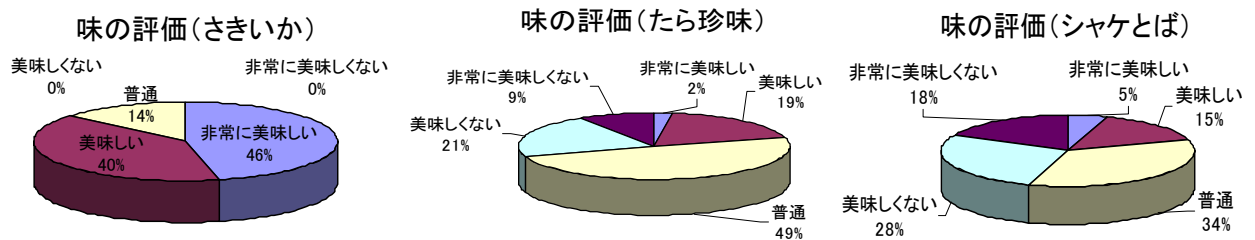


図-2 珍味アンケート調査結果

慣があり70円／個程度の価格でばら売りされているが、贈答用として高級感のある包装に入った月餅は数倍程度の価格で販売されている（写真-6）。また、日本に比べ湿度が極めて低い瀋陽市ではウェットに富んだ「さきいか」も短時間で乾燥するため、日本とは異なる対策が必要である。このように中国東北地域と貿易を拡大するためには、中国の生活習慣や気候風土等を十分考慮したきめ細かな販売戦略を構築することが重要である。



写真-6 月餅の販売の様子（左：ばら売り、右：贈答用）

(3) 瀋陽市における中華料理食材アンケート調査結果

日中間の物価格差を考慮すると味の評価が低いタラ珍珠やサケとば等の乾物を輸出するには、商品を中国向けに改良し付加価値を高めることが重要となる。前章で述べたように中国で乾物は、珍珠に限らず干シアワビ・ナマコ・ホタテの貝柱に代表される中華料理の高級食材として販売されている。北海道の乾物を中華料理の食材として中国へ輸出するメリットは、①高値で販売できるため輸出が促進される。②嗜好品に位置づけられる珍珠に比べ消費の増大が期待される。本件では、札幌市内にある



写真-7 タラ珍珠を使用した中華料理の試食アンケート調査実施状況

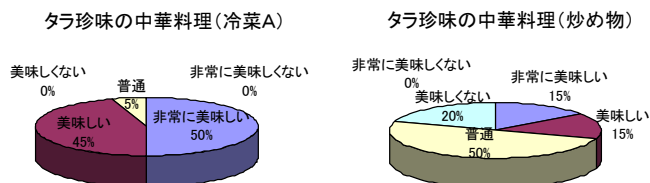


図-3 タラ珍珠を使用した中華料理アンケート結果

中華料理店（中国人が経営）の協力によりタラ珍珠を使用した中華料理2品（冷菜、炒め物）を創作し、2008年9月に料理のレシピとタラ珍珠を持って再度瀋陽へ渡り瀋陽の日本料理店でレシピどおりの中華料理を創作し試食アンケート調査を実施した（写真-7）。タラ珍珠を使用した冷菜では9割以上が美味しいと回答しており、前回実施した珍珠試食調査結果に比べ極めて高い評価が得られた（図-3）。価格では1皿（材料のタラ珍珠は1/10袋使用）平均600円の値を付けており、日本の珍珠が付加価値の高い中華料理の食材として輸出出来ることが提唱された。ただし、中国東北地域の料理には「香菜」と呼ばれる香りの強い野菜（多くの日本人には馴染まない味）の使用や味噌・醤油等が日本人と若干味覚が異なる。従って、日本人が美味しいと思う料理が必ずしも中国人に評価されるとは限らない。幸い北海道には、留学生、中国系企業や水産加工場等にも大勢の中国人が働いているので中国人の嗜好に合う中華料理の開発は比較的容易にできるものと推察する。

(4) 中国東北地域貿易の問題点

瀋陽市は函館市とはほぼ同緯度に位置している関係から、直線距離では北海道と中国東北地域は比較的近距离にある。商人の街上海は大阪と、首都北京は東京と比肩され、実際考え方や接し方に似ているところがあるが、中国東北地域と北海道は共に寒冷地であり、開放的で穏やかな人間が多い、酒を飲みながら人の繋がりを深めていくなど共通点も多く、友好を深め貿易を拡大するには最良の地域である。しかし、現在、北海道から瀋陽市までの海路は、朝鮮半島を経由し大連港に至るルートが最短で輸送距離は約1,300海里である（図-4）。この航路は、北九州—大連港ルートの2倍に相当するため輸送コストや輸送時間が問題となる。ロシア、中国、北朝鮮と国境を接する図們江は中国東北地域の吉林省に位置し、港湾ルートの開発による交易の拡大に極めて重要な地域である。このため1991年に国連開発計画（UNDP）が開発を推進することを決定したが、複数国間にまたがる計画であったため、遅々として進まなかったが2005年11月の新潟、2006年2月に琿春（図們江）で開発に向けた

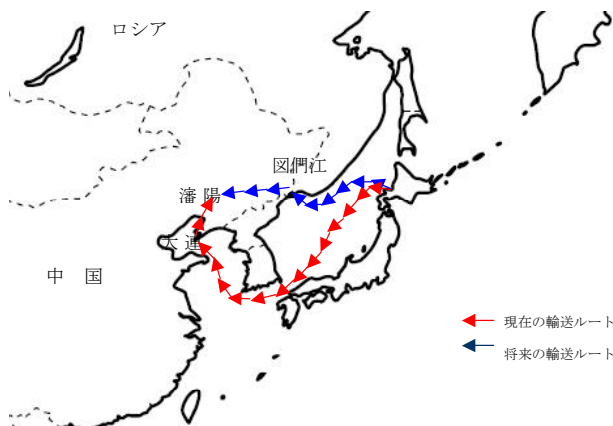


図-4 北海道—瀋陽市輸送ルート図

会議が開催されるなど進展の動きもある。仮に、函們江が開発された場合、北海道（日本海側）と中国東北地域は、約 500 海里で結ばれ大幅に輸送距離が短縮される。函們江から瀋陽市までのアクセスは高速道路や鉄道が整備されており、函們江開発の促進は北海道と東北アジア地域との貿易拡大には極めて重要である。

結論

戦後、米国中心に貿易を展開してきた日本は、米サブプライムローン問題から発生した世界同時金融危機により未曾有の経済停滞期を迎えている。この状況を打開するためには米国一極集中ではなく貿易の多極化、特に東北アジア圏と関係を強化することが重要であると考えられる。

調査を実施した2008年9月の瀋陽市は、メラミン入り粉ミルク問題が原因で中国産粉ミルクや牛乳等が全く売れない状況が続き、中国国内でも食の安全・安心に対して敏感な時期であった。調査に加わった多くの中国人は、「今、安全な北海道産の粉ミルクや牛乳を輸出すると多くの中国人は購入するし、北海道ブランドを中国全土にPR出来る絶好の機会である」と話していた。しかし、日本に帰って中国に関する報道を観ると、依然として毒入り餃子やメラミン入り粉ミルク事件に代表される食の安全や貧困問題等ネガティブな話題のみに終始している。

この年、北京オリンピックが開催されスポーツ・文化を始めとして様々な交流・取引が行われてきたが、それらの情報がほとんど日本に伝わってこない状況は正確な相互理解を図る上で大きなマイナスである。

全国と比べ水産業の比率が高い北海道も水産資源の減少や漁業従事者の高齢化が進み漁獲量・金額ともピーク時から半減している。中国東北地域への輸出促進に関する取り組みは、国内の市場価格が低下している中でより高い収益の確保、漁業の活性化、更にこれらを通じた北海道の水産供給維持・増大の観点から重要である。

本件は、北海道で製造した乾物の付加価値を高める方策について提案したが、本報告が、中国東北地域との貿易促進及び北海道水産業の増進に繋がれば幸いです。

謝辞：瀋陽市において2カ年に渡り調査を実施してきたが、この間、在瀋陽総領事館職員並びに中国人スタッフ、瀋陽市人民政府、瀋陽ノースメディア、瀋陽日本料理東京レストラン、函館市星野水産（株）、中華料理「兄弟姉妹」等々多くの方々のご協力により纏めることができました。

この場を借りて厚くお礼を申し上げます。